



THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Congre
Ko-sai Kaikann Building
Kojimachi 5-1, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8481, Japan
JCBL@congre.co.jp
Tel: 81-3-5216-5588 Fax: 81-3-3263-4032

日本脂質生化学会事務局
〒102-8481
東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル (株) コングレ内
JCBL@congre.co.jp
Tel: 03-5216-5588 Fax: 03-3263-4032

脂質生化学研究
Circular

2008

日本脂質生化学会
(JCBL)

目 次

第 50 回日本脂質生化学会のお知らせ		1
平成 20 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ		7
第 50 回日本脂質生化学会 発表演題の募集		8
第 50 回日本脂質生化学会 宿泊・航空券のご案内		11
節目となる第 50 回年会の開催に当たって	西島 正弘	15
第 50 回日本脂質生化学会を開催するにあたって	徳村 彰	16
脂質研究はこれから黄金時代をむかえると言う予感 (第 49 回日本脂質生化学会を終えて)	五十嵐靖之	18
第 49 回日本脂質生化学会に参加して	大戸 貴代	20
48 th ICBL に参加して	林 康広	21
第 49 回国際脂質生化学会議 (ICBL) の案内	五十嵐靖之	24
第 3 回 PLA ₂ と Lipid mediators 国際会議報告	和久 敬蔵	25
山添三郎先生を偲んで	和泉 孝志	27
脂質研究との出会い	青木 淳賢	29
脂質分子の世界は日本社会的	小林 哲幸	32
好熱性古細菌の脂質に魅せられて	須貝 昭彦	33
脂質生化学研究のはじめ	田中 進	35
今まで、そしてこれから	中村 和生	36
私と脂質との出会い	中山 玲子	38
会の活動状況		40
賛助会員		44
会則		46
学会事務の取り扱いと内容の連絡先		48

第 50 回日本脂質生化学会のお知らせ

メインテーマ:「脂質生化学研究:新時代への展開」

期日:2008 年(平成 20 年)6 月 5 日(木)・6 日(金)

会場:徳島県郷土文化会館(1F ホール,5F 小ホール,4F 会議室)

〒770-0835 徳島市藍場町 2-14

TEL:088-622-8121、<http://www.kyoubun.or.jp>

実行委員長:徳村 彰(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

〒770-8505 徳島市庄町一丁目 78-1

Tel:088-633-7248, Fax:088-633-9572

E-mail:jcbl08@ph.tokushima-u.ac.jp

発表形式:すべて口頭発表

A 講演:発表 15 分+討論 5 分=20 分

B 講演:発表 10 分+討論 5 分=20 分

講演時間は変更することもあります。

発表はすべて。液晶プロジェクターを用います。

会長講演 西島 正弘(国立医薬品食品衛生研究所)

特別講演 1 Alan Brash (Vanderbilt University Medical Center)

特別講演 2 Gabor Tigyi (University of Tennessee Memphis)

シンポジウム 1 「脂質メディエーターの新規代謝経路と生理機能」

シンポジウム 2 「酸化ストレス下での生体脂質過酸化反応の意義」

ランチョンセミナー 福澤 健治(安田女子大学)

- | | |
|--|-------|
| 1-1 「リゾホスファチジルイノシトールとその受容体」 | |
| 帝京大学薬学部 | 杉浦 隆之 |
| 1-2 「リゾホスファチジン酸産生酵素オートタキシンの炎症初期過程における機能」 | |
| 東北大学大学院薬学研究科 | 青木 淳賢 |
| 1-3 「食品からのリゾホスファチジン酸による胃粘膜保護」 | |
| 福山大学生命工学部 | 里内 清 |
| 1-4 「スフィンゴシン 1-リン酸の細胞外放出と ABCA1 トランスポーター」 | |
| 群馬大学生体調節研究所 | 岡島 史和 |
| 1-5 「 Δ^9 -アシルエタノールアミン産生・分解酵素の分子生物学的解析」 | |
| 香川大学医学部 | 上田 夏生 |
| 1-6 「酸化遊離脂肪酸をリガンドとする G2A の生理機能」 | |
| 群馬大学大学院医学研究科 | 和泉 孝志 |

○ シンポジウム 2： 6 月 6 日（金）

「酸化ストレス下での生体脂質過酸化反応の意義」

世話人：寺尾純二（徳島大学），板部洋之（昭和大学）

2-1 「脂質ハイドロパーオキシドの網羅的分子種解析」

東北大学大学院農学研究科 宮澤 陽夫

2-2 「炎症性疾患における酸化脂質のメタボローム分析」

東京大学大学院医学研究科 田口 良

2-3 「バイオマーカーとしての脂質酸化物」

産業技術総合研究所 吉田 康一

2-4 「リポタンパクにおける酸化リン脂質の産生」

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 盛重 純一

2-5 「皮膚の光老化における脂質過酸化反応の役割」

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 寺尾 純二

2-6 「自己免疫疾患に関与する脂質過酸化反応」

名古屋大学農学研究科 内田 浩二

2-7 「ミトコンドリア型グルタチオンペルオキシダーゼ IV の機能解析」

北里大学薬学部 中川 靖一

○ 会長講演：6 月 5 日（木）

「第 50 回年會を迎えた脂質生化学会：更なる発展をめざして」

国立医薬品食品衛生研究所 西島 正弘

○ 特別講演 1：6 月 5 日（木）

「Lipoxygenases and epidermal barrier function」

Vanderbilt University Medical Center Alan Brash

○ 特別講演 2：6 月 5 日（木）

「Lysophosphatidic acid—from bench to the clinic」

University of Tennessee Memphis Gabor Tigyi

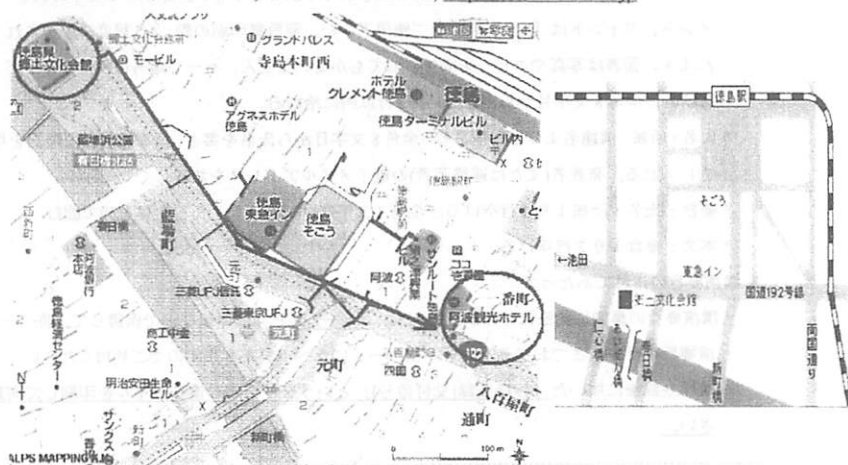
○ ランチョンセミナー：6 月 6 日（金）

「膜と過酸化脂質とビタミン E」

安田女子大学薬学部 福澤 健治

第50回日本脂質生化学会会場のご案内

- 学会会場：徳島県郷土文化会館 (4F, 5F)
☎ 770-0835 徳島市藍場町 2-14, TEL: 088-622-8121, <http://www.kyoubun.or.jp>
- 懇親会会場：阿波観光ホテル (5F クリスタルパレス)
☎ 徳島市一番町 3-16-3, TEL 088-622-5161, <http://www.awakan.jp>



交通のご案内

- 飛行機 (東京より1時間10分、福岡より1時間15分、名古屋より1時間)
- バス (大阪より2時間30分、神戸三宮より2時間、京都より3時間、広島より3時間45分、倉敷岡山より3時間20分、関西空港より2時間45分)
- JR (岡山より2時間20分)
- 徳島空港、徳島駅から学会会場 (徳島県郷土文化会館)
徳島空港から徳島駅 (徳島バス、所要時間25分、430円)
徳島駅から徒歩8分、徳島バス3,4番乗り場から乗車、南出来島駅下車3分 (45,46,47,48,55,56,57,58番線)、200円、地図参照
- 学会会場、徳島駅から懇親会会場 (阿波観光ホテル)
1日目の日程終了後、学会会場前より送迎バスの運行を予定しております。
学会会場から徒歩5分、地図参照

平成20年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を平成20年6月5日(木)夕刻、一般演題終了後(開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます)開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 西島正弘

- 議題
1. 平成19年度事業報告
 2. 平成19年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成20年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

平成20年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の総会を平成20年6月5日(木)昼頃に開催いたします(開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます)。幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 西島正弘

- 議題
1. 平成20年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
 2. その他

第50回日本脂質生化学会演題の募集

第50回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

() 演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学医療情報ネットワーク(Umin)のELBISシステム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意下さい。また印刷用の講演要旨を、昨年までと同様に紙媒体に印刷物として事務局まで送付して頂きます。尚、要旨右上隅外に鉛筆書きでページ数(例えば4ページの場合は、1ページ目(1/4)、2ページ目(2/4)、3ページ目(3/4)、4ページ目(4/4)のように)を必ずご記入ください。演題登録の開始は2008年2月14日(予定)、締め切りは2008年3月13日(予定)です。講演要旨の締め切りは2008年3月31日(必着)です。

○ 演題登録の仕方

- 1) 各ページの作成要領に従って講演要旨を作成して下さい。「要旨(600字以内)」は演題登録の際に必要ですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意下さい。
- 2) 日本脂質生化学会のホームページ(<http://nutrition.food.ocha.ac.jp/JCBL/>)にアクセスし、「第50回日本脂質生化学会演題登録」を選択して下さい。
- 3) 与えられた指示に従って演題登録を行って下さい。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意下さい。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取って下さい。
- 4) 登録終了後、抄録登録(登録番号)というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいて下さい。
- 5) インターネットが使用できない方、登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先(担当：有田誠)までご連絡下さい。

○ 講演要旨送付先 (講演要旨とコピー2部をお送り下さい)

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院薬学系研究科衛生化学教室内
日本脂質生化学会 講演要旨受付
電話:03-5841-4723 FAX:03-3818-3173
電子メール JCBL@congre.co.jp

○ 学会についてのお問い合わせ

〒770-0835 徳島市市町1丁目78-1
Tel: 088-633-7248 Fax: 088-633-9572 E-mail: jcb100@ph.tokushima-u.ac.jp
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 徳村 彰

1. テンプレートを使用する場合 <http://nutrition.food.ocha.ac.jp/JCBL/>から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフトワードで作成して下さい。テンプレート上で入力すれば、字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成下さい。
 - ・ A4の白紙に、縦260mm x 横170mmの大ききで印刷して下さい。原則として字の大ききは12ポイント、フォントは「MS明朝」をご使用下さい。要旨集印刷の際、4/5程度に縮小されて印刷されます。図表は写真やコピーを糊付けしてもかまいません。ページ番号は付けないで下さい。
 - ・ 演題名: 全角8文字目から書き始め、2行以内に治める。
 - ・ 氏名・所属: 演題名より1行空ける。全角8文字目から氏名を書き、所属は適当な略記を用いて()内に入れる。発表者(または連絡著者)の電子メールアドレスを記載してください。
 - ・ 要旨: 氏名・所属より1行空ける。全角1文字空けて書き始める。全体を枠で囲む。
 - ・ 本文: 要旨より2行空ける。
3. 講演要旨の送付にあたって
 - ・ 講演要旨の裏側に鉛筆にて印刷順を記し、コピー2部と共に厚紙などで保護して、前ページの「講演要旨送付先」までお送り下さい。次ページにラベルがありますのでご利用ください。
 - ・ 演題登録後に届いた「抄録登録(受付番号)」というタイトルの電子メールを印刷して同封して下さい。

(例)

新しいロイコトリエン B4 受容体 BLT3 のクローニングと解析

○東大太郎、京大花子(未来大・理・応用生命)、九大次郎(現在大・医・生化学)

toudai@m.u-tokyo.ac.jp

強力な生理活性脂質であるロイコトリエン B4 の新しい受容体 BLT3 をクローニングし、過剰発現細胞を用いて解析を・・・・・・・・

先に我々はロイコトリエン B4 の二つの受容体である・・・・・・・・

講演要旨を送る際には、この頁をコピーして下記のラベルを切り抜き、封筒にお貼りください。締切は平成20年3月31日です。なお、WEBからの演題登録（締め切り3月13日（予定））を忘れずに行ってください。

〒113-0033

東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院薬学系研究科
衛生化学教室

日本脂質生化学会抄録受付

第50回日本脂質生化学会 宿泊・航空券のご案内

平成20年6月5日(木)～6月6日(金)に徳島県郷土文化会館におきまして『第50回日本脂質生化学会』が開催されます事を心よりお祝い申し上げます。

この度、近畿日本ツーリスト㈱が大会に参加される皆様の『宿泊・航空券』のお申込のお世話をさせて頂くことになりました。

私共は、全国各地より大会へご参加される皆様方の利便を図るように企画準備いたしております。今回の開催日程の中で、週末にかかる宿泊・航空機は混雑が予想されます。お早目のご予約をおすすめ致します。

皆様方のご来徳を心よりお待ちしております。

KntI 近畿日本ツーリスト(株) 徳島支店
「第50回日本脂質生化学会」担当デスク

札幌市内宿泊のご案内

宿 泊 日 平成20年6月4日(水)～6月6日(金)間の宿泊をご用意しております。

地図記号	ホ テ ル 名	部屋タイプ	記 号	お一人様宿泊料金 (1泊朝食付税込)	場所
A	ホテルクレメント徳島	シングル	AS	11,000円	JR徳島駅隣接
		ツイン	AT	10,000円	
B	阿波観光ホテル	シングル	BS	10,000円	JR徳島駅より徒歩2分
		ツイン	BT	9,000円	
C	ホテルサンルート徳島	シングル	CS	9,000円	JR徳島駅より徒歩2分
		ツイン	CT	7,500円	
D	ホテルアグネス徳島	シングル	DS	8,000円	JR徳島駅より徒歩2分
		ツイン	DT	7,500円	

※ホテルの宿泊料金は、1泊朝食付・税金・サービス料込みのお1人様あたりの料金です。

※それぞれ確保している部屋数にふさがり次第、締め切らせていただきます。

割引航空券のご案内

《往路》

記号	区間	利用日	出発時間	通常料金	割引料金
A-1	羽田 → 徳島	6月4日(水)	16:40頃	27,200円	16,000円
A-2	羽田 → 徳島	6月4日(水)	18:30頃	27,200円	17,000円
B-1	羽田 → 徳島	6月5日(木)	7:20頃	27,200円	17,000円
B-2	羽田 → 徳島	6月5日(木)	10:25頃	27,200円	22,500円

《復路》

記号	区間	利用日	出発時間	通常料金	割引料金
A-1	徳島 → 羽田	6月6日(金)	16:20頃	27,200円	17,000円
A-2	徳島 → 羽田	6月6日(金)	18:45頃	27,200円	22,500円
I-1	徳島 → 羽田	6月7日(土)	9:30頃	27,200円	19,000円

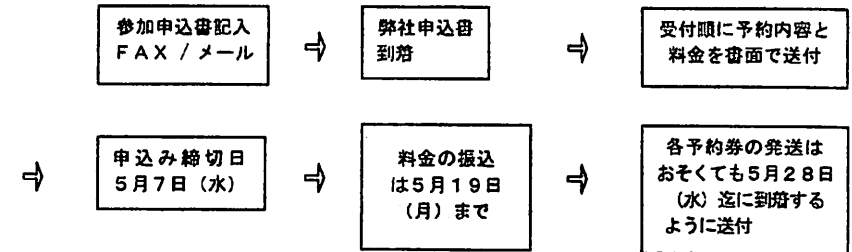
- ※ 上記出発時間は2007年12月現在の版ダイヤに基づいております。多少変更になることがありますのでご了承下さい。
- ※ 各設定便ともに5名様以上の申し込みがあった場合に限り、この割引が適用されます。
- ※ 各設定便毎にお申込のお客様が5名様未満の場合、各特別運賃でご利用頂くために便の変更をお願いする場合がございます。もしくは別途割引増料金となりますので、ご了承下さい。
- ※ 各便ともに確保している席が、満員になり次第締切りとさせていただきます。

お申し込みのご案内

本書に挟み込みの参加申込書に必要事項をご記入の上、ファクシミリもしくは、メールに添付し、近畿日本ツーリスト(株)徳島支店宛にお送り下さい。(メールは来年2月以降にご利用いただけます。)

申込締切日 平成20年5月7日(水) 必着

手続の手順を図式化しますと下記ようになります



変更・取消について

お申込内容の変更、取消につきましては、必ずFAXもしくはEメールにてご連絡下さい。
お電話での連絡はお受け致しかねます。
お取消の際は、下記の取消料を申し受けます。

宿泊・航空券

お申出日	宿泊	航空券
		東京～徳島間(片道)
15日前以降 10日前まで		¥2,420
9日前以降 前日まで	20%	¥4,420
当日午前中	80%	¥6,420
	不泊 100%	便出発以降 全額

- ※ 設定割引運賃での航空券のご利用は、搭乗日・ご利用便変更でも上記手数料がかかります。
- ※ 営業時間外のご連絡につきましては翌営業日の取り扱い(取消料)となりますのでご了承下さい。

お申し込み・お問い合わせ

〒770-0841 徳島市八百屋町1-14 三井生命徳島ビル2階

Knt! 近畿日本ツーリスト(株) 徳島支店

『第50回 日本脂質生化学会』担当デスク

電話 (088)622-0985 FAX (088)625-4887

jcb12008-tks@or.knt.co.jp

営業時間 平日 9:30～17:30(土・日・祝日は休業)

第50回日本脂質生化学会

宿泊・航空券申込書

住所 (都・道・府・県)		〒		郵便番号		航空機		宿泊			
〒		〒		〒		往路		夜路		記号	
必ずお手許に届く住所をご記入下さい。		(勤務先・自宅)									
代表者氏名											
勤務先名											
電話番号 TEL		内線 ()		携帯							
FAX 番号 FAX											
お名前		性別		年齢		往路		夜路		記号	
近畿太郎		男		55		A-1		A-2		AS	
ありかな		男女									
1											
ありかな		男女									
2											
ありかな		男女									
3											
ありかな		男女									
4											
備考欄											

※ 航空券：団体設定使以外の使の手配も承ります。
ご希望の方は備考欄にご希望内容（日時、区間、便名、割引種別など）をご記入下さい。
航空券の発売は2ヶ月前となります。お早目のご予約をおすすめ致します。
※ 宿泊：7インームをご希望の方は、同室の方のお名前（組み合わせ）を備考欄にご記入下さい。

節目となる第50回年会の開催に当たって
会長 西島正弘

日本脂質生化学会は、会員及び関係者の皆様のご支援により、2008年6月に徳島において、一つの節目となる第50回目の年を迎えることになりました。本学会の前身であります日本脂質生化学研究会は、1960年の準備会を経て、1961年に発足し、2005年に研究会から学会となり、本日まで至っております。当初は240名程の会員数でありましたが、現在は700名程の会員を擁する規模の学会へと発展し、この間、我が国における脂質研究の普及と発展に大きな貢献をして来しました。我が国の脂質研究が、糖脂質、リン脂質、コレステロール等いずれの分野でも国際的に非常に高いレベルにありますのは、本会のお陰であることに異論のないところであります。脂質研究者が一堂に会するこのような集会を50年も前に企画されました諸先生方の先見性とご尽力に改めて深く敬意を表する次第です。

近年、遺伝子組み換え技術の導入と幅広い応用により、ライフサイエンスの発展は目覚ましいものがありますが、脂質研究もその恩恵を十分に受け取り、脂質の代謝酵素・受容体・トランスポーターなどの遺伝子のクローニングやノックアウト細胞・動物の作成が可能となり、脂質の機能が、癌、免疫、脳・神経、生活習慣病、感染症など様々な分野において分子レベルで明らかにされてきております。さらに、脂質の分析技術の発展も目覚しく、特にソフトイオン化質量分析技術により微量なサンプルで網羅的解析が可能となり、新しい脂質メディエーターの発見や脂質の分子種レベルでの局在の解明などの成果が得られつつあります。これらの流れの中、脂質をターゲットとする新しい医薬品の開発も進められつつあります。このように、脂質研究は、基礎と応用の両面において、今後も益々その重要度を増すことは疑う余地のないところであり、大きな魅力と夢の溢れる領域でもあります。本会において、次世代を担う若手研究者が多数参加され、大きな活躍をされるよう願う次第です。

本会は、年1回の研究会を開催し、未完成な研究でもデータを出し合ってインフォーマルに議論する会として始められたものと聞いております。現在は必ずしもインフォーマルな会とはいえませんが、参加者は200～300人程度とこぢんまりしており、今後も、当初の趣旨も伝統として引き継ぎ、生化学会などの大きな学会との差別化を考慮しつつ、一層の発展を願うものです。日本脂質生化学会第50回の年を機に、我が国の脂質研究の中心として、世界に向けて多くの情報を発信できる学会を目指し、次世代を担う若手研究者を育てながら、一層の発展をするよう、会員の皆様と共に誓いたいと思います。

第 50 回日本脂質生化学会を開催するにあたって

徳島大学大学院 HBS 研究部 徳村 彰

平成 20 年の 6 月 5～6 日に第 50 回の大会を徳島市で開催する運びとなり、私はその実行委員長を仰せつかりました。大変な光栄に浴することとなり嬉しく思っております。今大会では、前二回の大会テーマ「脂質生化学研究、新時代への胎動 part1, part 2」を受け継ぎ「脂質生化学研究、新時代への展開」のテーマを掲げ企画を行ないました。節目の大会ということで、恒例となっているイブニングレクチャーに代えて西島正弘先生に会長講演をお願いしました。我が国における脂質生化学研究の半世紀の歩みと次の半世紀への展望を示していただけるものと思います。特別講演には、アメリカ合衆国テネシー州からお二人をお願いしております。バンダービルト大学医学センターの Alan Brash 教授は「Lipoxygenases and epidermal barrier function」と、テネシー大学メンフィス校の Gabor Tigyi 教授は「Lysophosphatidic acid -from bench to the clinic」と題して、最新の知見を交えた示唆に富むお話をいただけるものと期待しております。また、近年、注目されているトピックスを取り上げ 2 つのシンポジウム『脂質メディエーターの新規な代謝経路と生理機能』（世話人：杉浦隆之、上田夏生）、「酸化ストレスに対する生体脂質過酸化反応の意義」（世話人：寺尾純二、板部洋之）とランチョンセミナー「膜と過酸化脂質とビタミン E」（演者：福澤健治）を企画しました。若い研究者からの活発な質疑を期待しております。

私の脂質生化学会での最初の発表は、1978 年の第 20 回大会での大豆レシチン中の昇圧因子としてのリノホスファチジン酸 (LPA) の発見に関するものであり、以後、毎年、本学会で発表することを目標に研究を取ねてきました。LPA に加えて、私共が構造決定をめざしていたウシ脳の降圧性脂質は、D. J. Hanahan により構造決定された血小板活性化因子 (PAF) でした。その構造の新規性や pM での切れ味の良い活性発現のため、PAF は多くの研究者の注目するところとなりました。第 30 回大会の実行委員長の和久敬蔵先生が企画された生理活性リン脂質の研究に関するシンポジウムが熱気に溢れていたことが今でも思い出されます。そのシンポジウムで私は PAF 様脂質の発見の成果を示すことができました。これは、酸化変性リポタンパク中の活性脂質へと展開し、LPA 研究と並び、私のライフワークの柱となりました。このように、私にとって脂質生化学会での発表は、毎年、重要なイベントであり続けてきました。本学会が半世紀の歩みを基盤にして、若

い研究者が多く参画し新たな時代に本格的に展開し大きく飛躍することを願って本大会を企画しました。皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

今回の会場となる徳島県郷土文化会館は、20 年前にも山本尚三先生のお世話で第 29 回脂質生化学会が開催された会場であり、JR 徳島駅から歩いて移動できる位置にあります。本会館は内部改装を終え本年春に再オープンしております。15 年前には完成していなかった明石大橋開通により本州から徳島に向けて頻繁なハイウェイバス運行が可能となり便利になりました。多数の方に参加していただければと思っております。

脂質研究はこれから黄金時代をむかえると言う予感—第49回日本脂質生化学会を終えて

第49回脂質生化学会実行委員長 五十嵐 靖之
(北海道大学先端生命研究院、教授・院長)

平成19年6月5日(火)、6日(水)の2日間にわたって、第49回日本脂質生化学会が開催され、を担当いたしております。今回は、次年度半世紀を迎える50回大会の前の節目の大会として、前48回大会(東京)のテーマを受け継ぎ「脂質生化学研究:新世代への胎動 Part 2」とし、前回大会とできるだけ重複しない形でシンポジウム等を企画しました。その結果として全国各地から270名と言う最近ではなかった多数の参加者を数え、又招待講演3、シンポジウム12題を含めて全部で107の演題発表などを通して活発な討論が2日間に渡って繰り広げられました。このように参加された皆様のご協力もあり学会は大きな成功を納めることができたと自負いたしております。又大会初日の夕方の懇親会も札幌ビール園で開かれ、約80名の参加があり、札幌のビールとともに、蟹料理、魚料理など北海道の食材を堪能するなど楽しんでいただけたのではないかと思います。

この会では2つのシンポジウムを企画しました。一つは「グリセリドとそのリン酸化体の産生・相互変換とそれらが織りなす細胞内外のシグナルネットワーク」(世話人:徳村彰(徳島大学)、坂根郁夫(札幌医科大学))で、もう一つは「スフィンゴ脂質の病態と動態」(世話人:岡崎俊朗(鳥取大学)、木原章雄(北海道大学))で、どちらもその分野で世界的に注目を集めている3人の先生方の特別講演(Pann-Ghill Suh 先生、千葉健治先生、瀬藤光利先生)も聴衆に感銘を与えました。残念だったのはイブニングレクチャーでお呼びしていた箱守仙一郎先生が体調不良で来日できなかった事ですが、その後先生とお会いした時もすっかり体調を回復されており、皆様にお詫びも含めてよろしくお伝えしたいとのことでした。

脂質研究は、これからが黄金期を迎えると考え人が多いと思いますが、今回の学会を振り返ってみて、私も強くそう確信することができたように思います。即ち、生命科学の新しい展開には、ゲノム、蛋白質研究、RNA 研究と並んで、今やその先に脂質や糖などの2次代謝産物の研究の飛躍的な発展が必要とされています。脂質についていえば、コレステロール、中性脂質、リン脂質、スフィンゴ脂質、糖脂質、それらに関

連した生理活性脂質などの代謝調節や細胞内動態研究の進展と、これまでの物質の枠を超えた形でのリビドミクスやイメージングなどの新しい技術の開発が始まっております。また一方で、いわゆる脂質代謝に関連して国民的な課題になりつつあるメタボリックシンドロームなどの病態を考えると、これは個別の脂質の問題ではなく、その治療に貢献できるためにはこれまでの物質枠を超えた連携した研究が必要とされており、こうした連携研究を通しての創薬、健康科学の発展への寄与が今までにも増して強く求められているとします。この点では、すでに開発されている高脂血症などに対する薬以外にも脂質関連創薬の成功例もあちこちでポチポチと出つつあるといったニュースが流れるたびに心強く思っております。

日本脂質生化学会も次回で節目の半世紀、50周年を迎えます。私自身は今回の学会がそこにバトンタッチする役目を終えて内心ほっとしている訳ですが、この会が中心になりながら来るべき脂質研究の黄金時代を迎えるべく、会員諸氏の一層のご努力と研究の発展を切にお祈りいたしております。学会参加者の皆様、会の成功へのご協力、改めてありがとうございました。

第49回日本脂質生化学会に参加して

東京大学大学院医学系研究科細胞情報学教室 博士課程4年 大戸貴代

私にとって日本脂質生化学会は、非常に思い入れのある学会です。なぜならば、研究者の一員として初めて参加し、さらに口頭発表をさせていただいた学会だからです。2004年熊本で初めて本学会に参加させていただいた際には、恥ずかしながら脂質生物学の奥深さに感動したことが思い出されます。また、6月とは思えないほどの猛暑の中、初めて九州の土を踏み、強行スケジュールで史跡・名勝を巡ったことや、食べ物の美味しさを体験できたことも、本学会の記憶を鮮明なものとしている理由であるように思えます。

さて、今年度6月5～6日に開催された札幌での第49回日本脂質生化学会で、再び発表をさせていただく機会がもてました。遅ればせながら、私は細胞質型ホスホリパーゼA2の機能解析をテーマとして研究を進めております。脂質生化学の専門家が集まる本学会は、私にとって自身のテーマに関連する最新情報の収集はもちろん、新たな発想を生むきっかけを得るために大変重要であると考えております。一方で、脂質生化学という領域内で多岐に広がる各分野の講演を拝聴していると、自身が日頃気に留めている分野が知らず知らずのうちに偏ってしまっていることを痛感せずにはいられず、もっと意識的に開口を広げていくことが重要であるとも感じました。

本学会で特に印象的だったのは、特別講演で瀬藤先生(生理学研究所)がお話しになられた「マスイメージング技術開発とその脂質研究への応用」です。私の所属している細胞情報学教室は、同じく東大の田口先生(メタボローム講座)の研究室と協力研究室ということもあり、日頃から質量分析計のお話しを聞く機会に恵まれております。私自身も興味を持っている分野であることから、質量顕微鏡というイメージング技術があることは知っておりましたが、ここまで技術開発が進んでいるとは知らず、驚きと感銘を受けました。また、スフィンゴ脂質のシンポジウムは、断片的な知識を集約できるとてもよい機会となりました。何よりも自身の発表の質疑応答の際に諸先生方から建設的なご意見をいただけたことは、本学会ならではの貴重な時間でありました。

もちろん札幌でも心地よい気候と身の引き締まったカニを堪能することができ、勉強のみならず気分転換という意味でも非常に有意義な2日間を過ごすことができました。

最後になりましたが、第49回日本脂質生化学会の運営に尽力してくださった実行委員長五十嵐靖之先生をはじめスタッフの皆様には御礼申し上げます。と思います。

48th International Conference on the Bioscience of Lipids (ICBL)に参加して

九州大学 林 康広

「ICBLに行かないか」と、ボスに声を掛けられたのは5月のことだ。私は、今春に学位を取得したのだが、惜けないことに国際学会というものを経験したことがなかった。やっと思行けるぞと内心ニヤニヤしながら、参加することを伝えた。それからというもの、9月のフィンランドを夢見つつビペットマンを振る日々を過ごした。そうこうしている内に、夏の甲子園が終わり、フィンランドへの出発日となった。パスポートを握り締め出国手続きを行っている、横でボスの悲痛な声を聞いた、「パスポート期限が切れている、...」

ボスの見送りを受け、無事フィンランドへ着いた。第48回国際脂質生化学会(ICBL)は2007年9月4日～8日までフィンランドのトゥルクで行われた。トゥルクは、フィンランドの首都ヘルシンキから鉄道で2時間ほどの美しい港町で、かつての首都として栄えた古都として知られている。2011年には欧州文化首都(European Capital of Culture)の称号を受ける事が決まっているとのことであった。

今回のICBLは21のPlenary lecture、24のSelected oral communication、158のposter presentationが行われた。Conference chairはDr. Slotteである。ICBLのオープニングセレモニーの1つとしてDr. Seeligの講演が行われた。予想はしていたが英語を聞き取る事ができず、スライドを見て理解することにした。「やはり外国人は英語を話すのか」と、ぶつぶつ呟いているうちに、Get together partyへと進んだ。翌5日から8日にかけては、「Lipids and lipid domains」、「Computational studies」、「Proteins in membranes」、「Sphingolipids」、「Intracellular lipid transfer」、「Fatty acids」のセッションが開かれた。無論、日本人サイエンティストも黙ってはいない。Lipids and lipid domainsのセッションでは、半林義雄先生(理研)がラフト形成・アストログリア細胞の分化にphosphatidylglucosideに関わっているのではないかという新しい視点を提起し、大いに議論が盛り上がった。なぜ、phosphatidylglucosideのsn-2に飽和脂肪酸が組み込まれるのか(Remodelingか?)興味深かったが、英語で質問する勇気もなく、後でこっそりと日本語で半林先生に質問した。続いて、Intracellular lipid transferのセッションでは花田賢太郎先生(感染研)が、CERTのリン酸化がER-to-Gilgiのセラミド輸送に関わっているという講演をされた。非常に綺麗な研究で、自分もあのような素敵な仕事ができるようになりたいと憧れの眼差しで発表を聞いた。CHO細胞変異株分離から8年もの歳月をかけてセラミド輸送タンパクCERTを発見されるという話は、非常に私を勇気付けた。

さて、大会4日目、自分のポスター発表である。飛行機の中で作った拙い英文を丸暗記

して勝負することにした。ゆとり教育で育った輩とは違う、受験戦争時代を生き抜いてきた男である。丸暗記なら任せろと気合を入れて、ポスターの前に立つ。やがて、1人の外国人が近づいてきた。慌てて目をそらす、自分。微笑んでくる、外国人。気づかないふりをする、自分。これはあなたのポスターですかと聞いてくる、外国人、...。「もう、逃げられん」と、満面の笑みで放った言葉は「Yes, it is my poster!」。その後は、丸暗記した文章をひたすら喋った。説明を短くしてくれ、という外国人の要求にも答えられる訳がなく、覚えた英文をひたすら喋った。手や顔から汗が溢れ出した日本人に、これ以上は危ないと感じたのであろう。「Your job is very good」と、言って外国人は立ち去った。

その日の夕方。エクスカーションでトゥルク城（フィンランドで最も歴史のある城）へ訪れた。ガイドの方々が、かつての庶民が着ていた服装で案内してくれたこともあり中世の雰囲気を感じながら見学した。そして、ナントリ教会でトゥルク大学関係者によるオーケストラによるシュペリウスを聴き、Banquetへとすすんだ。郷土料理とワインを楽しむと自然に会場は賑やかになり、その喧騒を壇上のピアノマンが優しい音色で包んでくれた。宴もたけなわになった頃、ピアノマンの演奏を皆で聴こうではないかと北大の五十嵐先生が突然言われ、壇上に上がるや否やマイクを持ち「Listen to the nice music!」と会場に発した時には大いに盛り上がった。この席上で3人の若手研究者にPoster Awardが授与されたが、なんとそのうちの一人に私が選ばれた。来春からポスドクとしてNIHに留学する自分にとっては、何よりの励みになった。

私の国際学会の初陣は、このようなものである。英語が話せれば、きちんとdiscussion出来たのにと反省する日々である。ここでは書けなかったが、理研の平林先生、北大の五十嵐先生、感染研の花田先生、東北薬科大の仁田先生、阪大の東条先生、大阪医科大の生城先生等と色々な話をし、アドバイスを頂いた。実験が上手くいかないときには、先生方との話を思い出しながら自分を励ましている。最後になるが、ボスである。さすが、厳しい研究の世界で戦い続けている男である。不死鳥の如く大会4日目の会場に現れ、いつもの優しい笑顔で話し掛けてこられた。

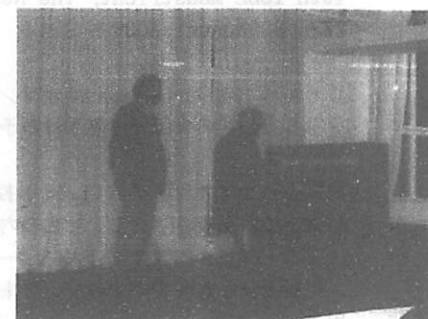
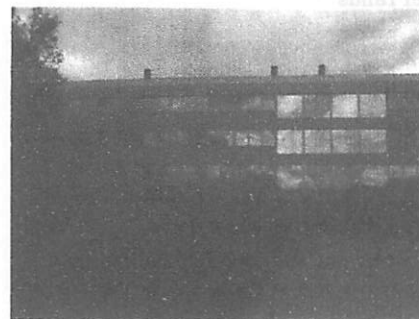


写真:学会が行われたTurkuの風景

第49回 国際脂質生化学会議 (ICBL) のご案内

(コレスポンデンス 五十嵐靖之)

49th ICBL Maastricht, The Netherlands

26 - 30 August 2008

08年のICBL ConferenceはオランダのMaastrichtで8月26日(火)から30日(土)の日程で開催される予定です。

組織委員長はオランダのGlatz教授です。準備が少し遅れている様子で、例年、年末までに発表する詳しい会議の内容はまだ公表されておりません。ICBL本部によると詳しい内容は1月末にホームページ (<http://www.icbl.unibe.ch/>) 上に発表になる予定ですので、興味がある先生方はどうかそちらをご覧ください。現在ICBLのホームページには、以下の情報だけが書かれています。

49th ICBL Maastricht, The Netherlands

26 - 30 August 2008

A dedicated conference website will be available by the end of January 2008

なお、この件に関するお問い合わせは、Web Siteを参照の上、ICBL理事を勤めている北大・五十嵐までおたずねください。

五十嵐 靖之 (Yasuyuki Igarashi)

e-mail: yigarash@pharm.hokudai.ac.jp

phone: 011-706-3970 fax: 011-706-4986

<http://biomem.pharm.hokudai.ac.jp/>

第3回 Phospholipase A2とLipid Mediators 国際会議報告

帝京大学 和久 敬蔵

第3回 Phospholipase A2とLipid Mediators 国際会議は2007年5月9-12日イタリー、ナポリ近郊のソレントでDr. M. Triggiani (ナポリ大学)のもとで開催された。この会は前回のDr. S. Nigam (ベルリン自由大学)により行われた第2回のものである。特にLipid Mediatorの会議は以前PAF会議として野島先生(第3回、1989)と私(第7回、2001)により日本で行われたもので記憶されている方も多いと思います。

さて、本会議の行われたソレントは風光明媚なところとして知られ、ナポリ民謡 帰れソレントへ(Torna a Surriento)は日本でもよく歌われている。

会議の参加者は約180人と前回の230人よりはやや少なく、発表数も11頭が93(前回108)、ポスター発表も28(前回78)となっている。確かにソレントは大会でなく、Triggianiもそれほどwell knownではなかったことも影響したのかも知れない。特に米国からの参加者が少なかったように思われた。

日本からは口頭発表26、ポスター発表6で香川大の上田先生によれば日本の発表は一番データがしっかりしているとのことだった。私も昔のことを思えば日本の脂質研究もずいぶん発展したものだと思える種の感慨があることは事実である。

Key Lecture (Plenary Lecture)としてE.A.Dennis(米国)、R.Mecoulum(イスラエル)、T. Shimizu(日本)、C.H.Macphée(米国)が選ばれ、Dennis以外は私が座長だったので少し紹介したい。Mecoulumはカンナビノイドの研究で古くから知られ、約40年前にカンナビノイドの全合成に成功している。1995年には本命の内在性カンナビノイドとしての2-アラキドノイルグリセロールの発見で私達と競合した。その後、私達はより生化学的研究へ、Mecoulumのグループはより生理的、薬理的な方向へ研究は進展した。今回はそれらのoverviewを行ったものである。T. Shimizuは1-アシル GPC アシルトランスフェラーゼ及び1-アルキル GPC アセチルトランスフェラーゼのクローニングについて報告した。

これは前者が40年、後者が20年も待ち望まれていた研究で、講演の半ばで皆が興奮してくるのがよく分かった。Ninio(フランス)は私もこれをやりたかったと述べ、最大級の賛辞を送った。MacphéeはPAFアセチルハイドロラーゼの善玉(PAFの分解)および悪玉(酸化脂質の遊離)としての生理活性について述べ、その生理的役割について

講演した。

それぞれの部会では LPA 部会が迫力があつた。G.Tygyi (テネシー大)は cLPA の生理活性と核内受容体との関係、徳村(徳島大)は LPA と生殖との関係、青木(東北大)は LPA と血管新生および安定性、J.Chun は LPA とその受容体との関係などそれぞれ今迄の実績の積み重ねを披露し、種々の部会の中でも内容が濃いものであつた。ちなみに cLPA はお茶の水女子大の室伏先生のオリジナルなのにそのグループの参加がなかったのは残念だった。次回の東京はぜひ沢山出して下さい。

他の部会も私の聞いたところは内容もあり特に日本の発表はよいものが多かったと思う。国際学会発表が始めての人も(例、Morishige, 徳島大)質問にも答えてよかった。

今回は 2009 年、東大の新井洋由先生を会頭として東京で行われる予定である。

山添三郎先生を偲んで

和泉孝志

群馬大学大学院医学系研究科
機能分子生化学分野



群馬大学名誉教授、山添三郎先生は 2007 年 1 月 15 日に御逝去されました。享年 98 歳でした。先生は本学会の前身である日本脂質生化学研究会の 3 人の設立者のお一人です。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、1908 年 10 月新潟県新潟市に生まれ、1932 年に新潟医科大学を卒業後、労働科学研究所にて研究に従事、満州の開拓科学研究所を経て、1942 年北京大学医学院で衛生学を担当されました。その後、1949 年群馬大学医学部生化学講座の教授に就任されました。1974 年に退官されるまで、多岐に渡る生化学の研究を行われました。代表的なものに、精子や赤血球の代謝に関する研究、細胞膜 ATPase の研究、筋肉及び脳のリン脂質代謝に関する研究があります。

脂質生化学との関わりでは、1956 年に北海道大学医学部安田守雄教授、東京大学医学部山川民夫教授と共に、日本脂質生化学研究会を設立されました。また、翌年 1957 年の国際脂質生化学会(英国)にて、ホスファチジン酸およびイノシトールリン脂質と神経機能に関する研究を発表されております。その後、一連の研究成果を J Biochemistry に 4 連報で出されました。小動物の脳に放射標識リン酸が取り込まれることを利用してリン脂質の解析を行い、ホスファチジン酸やイノシトールリン脂質などへのリン酸の取り込みがイオンの動きと関連していることを見出したもので、リン脂質と神経機能との関係を提唱した先駆的なお仕事です。先生は、1970 年の第 12 回日本脂質生化学研究会・研究集会の実行委員長を務められました。これは、群馬県伊香保温泉にて開催された、大変なごやかな研究集会であったとのことでした。

また、先生は国際的なエスベラント学者でもあり、日本エスベラント学会理

事や国際エスペラント協会事務局長などを歴任されました。また、晩年に編集された英語・エスペラント語医学用語辞典、エスペラント語・英語医学用語辞典は世界中で利用に供されています。

以上のように先生は、生化学の研究及び教育等を通して、多くの業績を挙げられ、1980年に勲三等旭日中綬章を受賞されています。

ここに改めて先生のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

「脂質研究との出会い」

東北大学大学院薬学研究科 青木 淳賢

私の脂質研究との出会いは、1986年（昭和61年）4月に東京大学薬学部の井上圭三先生（現帝京大・薬）の研究室に配属されたときです。後から思うと、その当時、井上研では工藤一郎先生（現昭和大・薬）を中心としてホスホリパーゼA₂の実態が世界にさががけて解明されていたという画期的な時期でした。そんなこともよく知らないで井上研に配属された私の研究テーマは、Dr. Paganoらが開発した蛍光リン脂質（Rhodamine-PE、NBD-PE）を合成し、リボソームの融合を定量化するというものでした。まず、1m近い長さのアルミナカラムを立てて、卵黄10個からPEを精製しました。その後PEを蛍光試薬と混ぜ何とか目的の蛍光脂質を合成できました。その後、小林哲幸先生（現お茶の水大・理）、梅田真郷先生（現京大・化研）や研究室の多くの先輩方に御指導いただき、蛍光リン脂質を含んだリボソームを合成し、何とかリボソームの融合を定量化することができました。真夜中に旧型の蛍光測定機を前に、PSリボソームにCa²⁺を加えたときだけRhodamineとNBDの間でenergy transferが起きることを確認できたのは、目で見えないリボソームの融合を可視化出来た瞬間であり、今でも鮮明に覚えています。

大学院では私が癌に興味があると言ってしまった（？）のが原因で、細胞の癌化と糖タンパク質という研究テーマで研究を行いました。ほんの少しの増殖因子（上皮成長因子、EGF）の添加で足場依存性を失う細胞株を与えられ、どうしてこのような劇的な足場依存性が変化するのか考えて見なさいという広大な研究テーマでした。当時助手の梅田先生と2人3脚での研究でしたが、運良く、脳神経系の接着因子として知られていたNCAM（Neural Cell Adhesion Molecule）が細胞の癌化で大きく変動することを見出し博士学位にまとめることができました。研究室ではリン脂質、ホスホリパーゼA₂に関する世界トップレベルの研究が行われていましたので、脂質を研究していない身でも自然と脂質に関するバックグラウンドを勉強することが出来ました。また、井上・梅田両先生の厳しく、常に一流を目指す研究指導を受けたことは、博士卒業後になって大きな自信になりました。

博士取得後は東京都臨床医学総合研究所微生物部門の野本明男先生（現東大・医）のもとで、ポリオウイルスに関する研究を行いました。当時野本研では小池智先生（現都・精神研）を中心にポリオウイルス受容体遺伝子が単離されたばかりであり、ポリオウイルス受容体トランスジェニックマウスが作製されて個体レベルの研究が行なわれようとしていました。学生時代には、細胞、タンパク質、脂質、糖しか扱ったこ

とがなかった私にとって体験するものすべてが新鮮で朝から晩まで研究に没頭できました。野本研で習得した分子生物学的手法、マウスの個体レベルでの解析手法はその後の研究で大きく役に立ちました。また、ポリオウイルス受容体（この分子自身はイムノグロブリンスーパーファミリーの分子でした）の生体内における生理機能として細胞間の接着因子として機能することを見出しました。これらの分子は高井義美先生らのグループにより現在ではNectin, Neckleとして癌化との関連も含め盛んに研究されています。

その後紆余曲折があり、1994年9月より井上圭三先生に助手として採用していただくことになり、思いかけず脂質の研究を始めることになりました。それまでまともに脂質を研究したことが無かった私にとって初めて真剣に脂質と向かい合うことになりました。脂質と言っても漠然としすぎており、当初何に焦点を絞るべきか正直よくわかりませんでした。ただ、学生時代、臨床研での経験から増殖因子、生理活性物質に関する研究を個体レベルで行ってみたいという思いがあり、血小板活性化因子（PAF）、リノホスファチジン酸（LPA）、リノホスファチジルセリン（LPS）などの生理活性脂質の研究をはじめることになりました。1994年当時は、井上研の助教授だった新井洋由先生が細胞内型 PAF-AH をクローニングに成功された頃であり、井上研は活気にあふれていました。また、新井先生の神業に近いタンパク質精製技術と龍尾擴士、堂前直両先生（理研）の最先端のタンパク質解析技術（+大学院学生さんの昼夜を問わない努力）で、それまで精製が困難であった多くの脂質関連タンパク質の実態が明らかにされました。私は、特に生理活性脂質関連のタンパク質に関して分子細胞学的方法論で機能解析を行いました。この10年間で、リノホスファチジン酸（LPA）受容体 EDG7/LPA₅、ホスファチジルセリン（PS）特異的ホスホリパーゼ A₁（PS-PLA₁）、ホスファチジン酸（PA）選択的ホスホリパーゼ A₁（PA-PLA₁）、リノホスホリパーゼ D などの分子を遅良く同定することが出来、現在ではこれら分子を介した生理活性脂質の機能解明を個体レベルで行っています。

これらの研究を行うにあたり脂質生化学分野の多くの先生にお世話になりました。PA-PLA₁ 分子の性状解析にはマスマススペクトロメトリー（MS）が非常に有効でした。当時（平成12年頃）名市大・薬にいらっしゃった田口良先生（現東大・医）のもとに何度も通わせていただき、納得できるマスマスペクトルが取れるまで ESI-MS で解析していただきました。おかげさまで PA-PLA₁ を発現した細胞では不飽和型の LPA が産生されることを明確に示すことが出来ました。また、同時に脂質研究における MS の重要性も認識しました。LPA や PAF 研究の先駆者である徳島大学の徳村彰先生には学会の度に discussion させていただき、この分野の奥深さを教えていただきました。東

大・医の清水孝雄先生は生理活性脂質分野の第1人者であり、その研究の進め方も含めいろいろ勉強させていただいています。また、清水研も含め脂質生物学の若手の先生方（横溝岳彦先生（現九大・医）、石井聡先生、杉本幸彦先生（京大・薬）、村上誠先生（都・臨床研）、伊藤俊樹先生（神戸大・医）、有田誠先生（東大・薬））には同世代・同じ領域の研究者として多に刺激されています。今後も一緒に日本の脂質生物学を盛り上げていきたいと思っています。

私は、平成19年4月より東北大学大学院薬学系研究科で研究室を主催させていただくことになりました。薬学部は6年生の問題で多少不安定な時期ではありますが、東北大薬学部には向上心を持った優秀な若い学生が多くおります。近い将来これらの学生が日本脂質生化学会にて発表できるようにしっかりと指導を行っていこうと思っています。

脂質分子の世界は日本社会的

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻 小林哲幸

約 30 年前に、長さ約 1.5m、内径 10cm 程のカラムを使ってウシの心筋からカルジオリピンを抽出・精製する実験操作を、当時、助手の西島正弘先生から教わりながら私の研究生活はスタートした。生体膜の構造と機能に漠然とした興味を抱いて、東大薬学部衛裁教室の野島庄七教授のご指導のもとで卒研をした時のことである。その後、井上圭三教授、工藤一郎助教授の体制に引き継がれた後まで、学位取得と助手の期間を合わせて約 10 年間に衛裁教室にお世話になった。その間、大腸菌リゾホスホリパーゼや哺乳類ホスホリパーゼ A₂、脂質結合タンパク質などについて生化学的解析を行い、脂質分子特有の取扱い方法や分析手法を学びながら、定量とバランスを基盤にして「脂質分子から細胞機能・病態を探る」という、今の自分を支える研究姿勢を築くことができた。

アメリカでのポストドク生活は、西島先生が留学された Christian R.H. Raetz 教授のもとでプラズマローゲンの抗酸化作用を研究した。この時も最初の実験操作は、ウシ心筋からコリンプラズマローゲンを大量に調製することだった。どうもウシの心筋とは縁が深い。Raetz 研では、脂質構造解析データの執拗なまでに深い見方を学んだ。留学を終えて、名市大薬学部の奥山治美教授の研究室で助手、講師を務めさせて頂いた。奥山研では、リン脂質代謝研究とともに、 α -リノレン酸、EPA、DHA など ω 3 系脂肪酸の機能について、脂質栄養学的観点での研究に参加した。基礎的研究者としての社会貢献・説明責任の重要性を知った。映画「Lorenzo's Oil」を観て感動し、脂質栄養の重要性を再認識したのもこの時である。その後、お茶大理学部生物学科へ助教授として赴任し、室伏きみ子教授が真性粘菌から発見された環状ホスファチジン酸について、高等動物での存在と生合成酵素、生理機能の解析を行った。最近では、東大院医の田口良教授との共同研究によって、質量分析を用いた脂質メタボローム解析を開始した。「脂質分子から細胞機能・病態を探る」をテーマに掲げ、今後も脂質と向きあって行きたい。

生体内のほとんどの脂質分子は、弱い結合に基づくファジーな特異性で周囲の生体分子と相互作用して存在する。しかし、その生体内分布や組成は一定のバランスに保たれ、ドメイン構造・集団として機能を発揮している。そんな集団から、一部の生理活性脂質分子が微量、産生されて特異的な個性を輝かせる。私には、そんな脂質分子が極めて日本人的にみえる。個人主義を基盤にして市民社会が成立している欧米社会を「石の社会」とすれば、日本は「粘土の社会」と比喩されることがある。日本人は個人が目立つことをあまり望まないが、集まることによって多様で精密な形(機能)を発揮する。脂質分子がつくる各種ドメイン構造は懐の深さがあり、主役を活躍させる場を提供することでその存在意義を保つ。そんな脂質分子を考えると、その役割を明らかにしてあげたい。自分が何故、脂質生化学を研究領域に選んだのか、こんなところに答えがあるのかも知れない。

この度は、日本脂質生化学会の幹事に加えて頂きまして、ありがとうございます。微力ながら今後とも日本の脂質生化学研究の発展に尽くしたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

好熱性古細菌の脂質に魅せられて

北里大学一般教育部自然科学教育センター・化学単位 須貝昭彦

本年 1 月から脂質生化学会の幹事を引き受けさせていただくことになりました。多々至らぬ点があると思いますが宜しくお願い致します。

私の所属している一般教育部は、大学の 1 年次教育を担当しております。この組織の前身は「教養部」で、この十数年の間に改組、センター化され、最終的に一般教育部という名称に落ち着きました。その間に大学教員を取り巻く環境もだいぶ変化してきました。FD の導入、学生による授業評価、教員評価、任期制の導入など、あたかも今まで怠けていたかの様な締め付けが教員に対して行われるようになりました。一般教育部では、更に新学習指導要領で学んだ学生への対応など、教育へ費やす時間が多くなってしまっています。一般教育部でのこうした教育に重点を置かなければならない環境の中、時間を見つけてやりくりしながら研究を行っております。主要研究テーマは、故金子弘先生や昨年定年退職された伊藤俊洋先生の後、私と宇田郁子講師と共に「好熱性古細菌の脂質」を踏襲しています。好熱性古細菌は熱水噴出口や噴気口など地球創生期の環境に近い場所に生息し、太古の昔から細々と生きながらえてきた生命体です。生物の系統樹をみると、根元に近い部分の生物は好熱性のものが占めており、地球上に発生した初期の生命体は好熱性であったと考えられます。その共通祖先の形態を想像する上で、好熱性の生物の膜脂質を調べることが重要です。その 1 つの選択として私達は好熱性古細菌の脂質分析を遂行している次第です。好熱性古細菌の培養はそれほど難しくはありませんが、生菌数がある程度増加すると増殖が止まってしまう、一度の培養で得られる菌体量がとても少ないといった問題があります。遺伝子レベルの研究は別として、脂質の構造を調べたりするにはあまり向かない材料ではないかと思えます。しかし、普通の研究者は手を出しませんので、かえって他との競合もあまりなくテーマとしては良いのかもしれません。古細菌の脂質は、2 本の C₂₀ イソプレノイド鎖がグリセリンの sn-2, 3 位にエーテル結合した archaeol とよばれるジエーテル型の脂質の基本構造(脂質骨格)からなっています。好熱性のもものでは 2 分子の archaeol がイソプレノイド鎖同士で向き合い、その末端同士で結合しあったマクロサイクリック構造の caldarchaeol が主要脂質骨格です。また、好酸好熱性古細菌 *Sulfolobus* 属の菌株では、caldarchaeol の片側のグリセリンがカルジトール(グリセリンに 5 員環のポリオールがエーテル結合したもの)とよばれるポリオールに置き換わった calditocaldarchaeol が特異的に存在しており、このものの存在が *Sulfolobus* 属に属するという分類学的な指標の 1 つとなります。

好熱性古細菌の膜は、archaeol 型脂質がイソプレノイド鎖を向き合わせて 2 列に並んだ二分子膜ですが、好熱性古細菌では向かい合わせのユニット同士が結合しあひ caldarchaeol 型脂質となって単分子膜を形成しています。また、嫌気性の超好熱性古細菌 *Thermococcus* 属の菌株では、培養の増殖段階で archaeol 型脂質と caldarchaeol

型脂質の比率が大きく変化することが分かってきました。増殖の初期の段階では archaeol 型脂質の占める比率が大きいのですが、増殖が進むに連れて archaeol 型脂質が減少し、caldarchaeol 型脂質の比率が大きくなります。分裂を終えた直後から細胞が成熟する段階で、膜構造が二分子膜から単分子膜へと変化している可能性について、これから検証していくところです。

C₃₉ イソプレノイド鎖には 4 つのメチル側鎖があり、実質的な炭素鎖長は C₃₅ のパルミチン酸と同じです。古細菌の脂質は真正細菌や真核生物と異なるようにみえても、このような炭素鎖長の類似性やポリオールとして基本的にグリセリンを使用していることなどの類似性を持っています。この類似性が偶然ではなく膜脂質に必要な基本的要素として考えると、共通祖先に少し近づくことができるかもしれません。

世の中の研究の主流とはちょっと異なった研究ですが、これからも脂質生化学会で研究成果を発信して行く所存でございます。ご興味がお有りでしたらお声がけ下さい。

脂質生化学会の先生方には、引き続き今後とも一層のご指導、ご鞭撻ならびにご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

脂質生化学研究のはじめ

高崎健康福祉大学健康福祉学部健康栄養学科 田中 進

この度、日本脂質生化学会の幹事にご推薦頂き、大変光栄に存じます。自己紹介と所属する大学について簡単ではありますが、ご紹介させていただきます。

そもそも私が脂質生化学研究に出会ったきっかけは、大学院生として群馬大学医学部生化学教室の門を叩いたのが始まりです。当時の生化学教室は、本学会の長年の幹事をされている山下 哲先生が教室を主宰されており、保坂公平先生（幹事、群馬大学）、仁川純一先生（九州工業大学）、小瀧 努先生（京都大学）、内田 勉先生（故人）、杉本博之先生（幹事、獨協医科大学）といった先生方が在籍しておられ、精力的にご研究をされていました。私の与えられた最初の研究テーマは、酵母の変異株を利用した相補的クローニング法による動物のホスファチジルエタノールアミンメチル化酵素遺伝子のクローニングでした。しかし、始めてしばらくたって、カナダのアルバータ大学の Vance のグループに先を越され、早くも挫折したことを覚えております。当時の山下研究室は、酵母におけるコリンとイノシトールによるリン脂質代謝調節の解析を研究の一つの大きな柱としており、その解析過程でリン脂質の合成経路を欠損した変異株が数多く単離されていました。また教室では、その変異株を利用した相補的クローニング法により、多くの酵母のリン脂質合成酵素遺伝子や転写調節因子遺伝子のクローニングがなされ、大きな成果を挙げていました。従って、酵母遺伝子のクローニング法と同様に相補性を用いた手法で動物の遺伝子をクローニングする上は出来上がっていたのです。当時、このような手法による動物遺伝子のクローニングは少しずつ報告され始めていました。また、リン脂質合成に関与する酵素はその殆どが膜結合タンパク質であるためそれらの精製は殆ど成功していませんでした。そこで、生化学教室では酵素の精製を経ずに直接これらの酵素をコードする遺伝子クローニング法が検討されていました。こういった中で教室では保坂先生が最初にこの手法によりヒトコリンキナーゼ遺伝子の単離を試みて、クローニングを成功させました。このような状況の中で私が与えられた学位テーマが先述した動物遺伝子のクローニングだったわけですが、その後紆余曲折があり、中野明彦先生（東京大学、理研）から供与して頂いた変異株からホスファチジルイノシトール輸送タンパク質βをクローニングすることができ、学位を得ることができました。

高崎健康福祉大学へは平成 14 年 4 月に着任し、今年で 6 年目の在職になります。北関東の群馬県高崎市にある私学ですが、平成 18 年、宇井理生先生を学部長にお迎えして薬学部が設置され、現在、看護学部、健康福祉学部（医療情報学科、保健福祉学科、健康栄養学科）を併せて 3 学部が設置されています。私の所属する健康栄養学科は、管理栄養士を養成する学科であり生化学の教育も大きな仕事の一つとなっております。研究室は決して大きくはありませんが、これからも脂質生化学の研究を進めていきたいと思っております。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。

今まで、そしてこれから

北里大学一般教育部・自然科学教育センター・生物学

北里大学大学院・医療系研究科・分子病態学群

中村 和生

このたびは幹事に推薦いただき、大変光栄に思っています。この機会に自己紹介をさせていただきます。

私は長らく北里大学医学部に勤務した後、2006 年に一般教育部生物学に異動し、2007 年より教授に就任しました。一般教育部は、北里大学の7学部(薬学、医学、看護、医療衛生、獣医、海洋生命科学、理)の1年生の教育を担当する部門です。一般教育部の化学には、今回同じく幹事になられた須貝昭彦先生がおられます。仕事の中心はフレッシュマンに対する講義と実習です。北里大学はすべて医療系・生命科学系ですが、学生の気質も様々で、また高校の選択性で理科の科目の中で履修していないものがある人もいます。従って講義は一筋縄ではいきません。私は大学院の教員も兼任していますが、一般教育部自体には院生はいないわけですし、また1年生だけなので卒研生も他学部から来てもらうしかなく、研究環境は厳しいのが実状です。しかし、今後整備を進め研究室の発展に努めたいと思っています。

本会には1982年頃、大学院博士課程の時に入会しました(当時は学会ではなく研究会でした)。1999年には、北里大学の玉井洋一先生が第41回の研究集会を鎌倉で開催され、そのお手伝いをしました。また長年にわたり、脂質データベースの構築に関与してきました。現在ではこのデータベースはLipidBankとして、本学会の管理下にあることは皆様ご承知のことと思います(<http://lipidbank.jp/>)。

さて、私は埼玉大学理学部生化学科の卒業で、修上課程では橋本洋一先生の下で、アラビノガラクトタンパク質を研究しました。この研究の始まりはちょっと変わっています。当時、千代田区三番町にあった警察庁科学警察研究所(科警研)の山本茂先生は、殺人事件で血液が付いた枕カバーから血液型を決定しようとして困難な状況に陥ったある県警から応援を求められました。蕎麦殻の成分が、血液型判定に使用するレクチンを妨害していたのです。山本先生は身の回りにある様々な物質が血液型判定に及ぼす影響を調べ、ダイコンにH型判定用のレクチンを妨害する成分があることを見いだしました。問題の成分はフコースを持つアラビノガラクトタンパク質であり、ダイコンやカブなどアブラナ科の植物に含まれることが分かりました。科警研での血液型の研究から糖脂質に興味をもち、当時東大の山川民夫先生の所から東京医科歯科大学へ異動され、新講座を立ち上げたばかりの飯田(はんだ)静夫先生の門をたたいたのです。研究室の先輩には橋本典先生(現帯広畜産大)がいます。初仕事はブタ膵臓の糖脂質で、膵臓ではCDIIがラクトシル型ではなく、ダイガラクトシル型であることを発見し

しました(*J. Biochem.*, 95)。またガングリオシドのシアル酸カルボキシル基をエステルやN-メチルアミドにする、きわめて収率のよい方法を開発しました(*J. Biochem.*, 99)。この方法はガングリオシドの生理活性や、分解酵素の研究で国際的にもよく引用されました。研究では思った事と違う方面で成果が出ることはよくあります。TLC 免疫染色が試みられ始めた頃、TLCに展開した糖脂質に抗体タンパクが結合すれば、その部分だけクマジーで染色できるだろうと考えてやってみました。ところがなんと全ての糖脂質が鮮明に染色されてしまいました。リン脂質やコレステロール、トリアシルグリセロールなども高感度に染色されました。クマジーによる脂質染色(*Anal. Biochem.*, 142)はセラミドなどの検出などに結構重宝されました。

博士の学位をとった年に北里大学医学部生化学の玉井洋一先生の助手として就職しました。最初の仕事は、脊椎動物の進化に伴う脳ガングリオシドの変化の研究で、軟骨魚類から新系列のガングリオシドを同定しました(*J. Biol. Chem.*, 263)。今にして思えば構造決定だけでJBCに載る良き時代でありました。また麻布大学の川上泰先生と共同で、糸虫(サナダムシ)の糖脂質を調べ、擬葉目に特徴的に存在する新規糖脂質を発見しました(*J. Biochem.*, 114 など)。これはグルコースが糖鎖の末端ではなく、間に入っているユニークな構造をしています(そのGlcをGlcNAcに変えればSSEA-1即ちLewis x 抗原と同じ)。現在もこの糖脂質の機能や分布について研究を進めています。

1990年から2年間、ニューヨーク(Bronx)のアルバートアインシュタイン医科大学のR. Ledeen 教授の所に留学し、培養神経細胞に対するガングリオシドの影響を研究しました(*J. Neurosci. Res.*, 44 など)。留学中にメトロポリタン歌劇場やカーネギーホールの会員となり、休日には音楽を随分楽しむことができました。その後、ミエリン脂質で有名だったW. Norton 教授とreactive astrocyte についてガングリオシドGD3を中心とした免疫組織学的研究を行いました(*Glia*, 16)。帰国後も糖脂質の研究を続け、最近では神経発生におけるSSEA-1の発現や未分化神経上皮細胞の接着と脂質ラフトの関係などを、柳沢亮博士(ジョージア医科大学)との共同研究で行いました(*Genes Cells*, 9 など)。一方、学内の研究者からの要請もあり、MALDI-TOF MS を利用したタンパク質の同定(ペプチドマスフィンガープリンティング)も手がけるようになりました。

今後は、一般教育部の初年時教育に努力すると共に、研究面では、輸送小胞などを含めた生体膜の脂質構成、膜タンパク質の機能環境としての脂質の役割、寄生現象と糖脂質の関連などについて解析していきたいと考えています。また、幹事として本会の発展に微力ながら努力していく所存ですので、どうかよろしくお願い申し上げます。

「私と脂質との出会い」

京都女子大学 家政学部 食物栄養学科 中山 玲子

このたびは日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、誠に光栄に存じております。何卒よろしくご指導くださいますようお願いいたします。

私は京都大学大学院農学研究科博士課程に在籍中、細菌におけるグルタチオン(GSH)代謝関連酵素の生化学的及び応用生産学的な研究をしていました。対象の膜酵素 γ -GTPが膜リン脂質(PL)によって活性化されるということから、脂質の世界に足を踏み入れました。当時、市販のPLは高価で種類が少なく、やはり研究対象の細菌の膜PLを単離・精製した方がよいということから、京都大学食糧科学研究所の鬼頭誠教授(現名誉教授)の研究室に1週間通い、脂質の抽出・精製や定量方法を教えていただきました。脂質の抽出に抵抗なく入れたのは、文献等で γ -GTPやGSHとの関連からロイコトリエンなど生理活性脂質に興味を持っていたためかも知れません。一方、医薬品の微生物生産という観点から、 γ -GTPの転移反応を利用してさまざまなアミノ酸を γ -グルタミル化(例えば γ -グルタミル-DOPAなど)し、質量分析計にて反応生成物の化学構造および結合様式(α 結合ではなく γ 結合であること)を同定するという研究もしておりました。質量分析については、京都大学農学部農薬施設の上野民夫先生(現京大名誉教授)にご指導いただきました。

大学院を修了後、1984年に関西医科大学医学部医化学教室 齋藤國彦教授(現名誉教授)の助手という機会に恵まれ、本格的な脂質生化学の世界に入りました。齋藤教授からは脂質の抽出、精製、分析にいたるまで、直々にご指導いただき、研究領域や視野が広がったことにも感謝しています。タンパク質、ペプチド、アミノ酸を対象にしてきた私にとって、脂質研究の世界はまさに「水と油」を再認識するものであり、最初戸惑いましたが、この経験は脂質を取り扱う初心者に対して指導する際に、大変役立っています。

当時、齋藤研究室では里内浩先生(現福山大学教授)が、PAF(血小板活性化因子)の構造決定者である米岡 Texas 大学 San Antonio 校 Dr.Hanahan 研究室の留学から帰国され、SIM法によるPAFの定量、分子種分析法を開発されたところでした。この分析法により、PAFを産生する細胞・組織やその刺激因子、分子種が次々と明らかになり、PAFと疾病との関与が示唆されました。1989年に第3回PAF国際会議(野島庄七先生会長)が東京で開催され、そのサテライトシンポジウム“PAF and Diseases”を齋藤先生が奈良で主催されました。その準備等に末席ではありますが関わらせていただいたこと、国内外のPAF研究の第一人者の先生方にお目にかかれたことは、大きな刺激になりました。

1990年に京都女子大学に移り、学生が動物を触りたがらないということから、真核生物のモデルとして酵母を用いてPAFを検索し、質量分析で同定しました。以来、酵母におけるPAFの生理機能等について細々と研究を続けてきました。教育や大学の運営等に忙殺され、研究する時間が無いとばかりこともありました。本学科に徳島大学を定年退官され

た山本尚三先生(現徳島大学名誉教授)が来られ、先生自らが実験されるお姿を拝見して、大変励みになりました。このたび、恩師の京都大学大学院生命科学研究科熊谷英彦教授(現京大名誉教授、石川県立大学教授)との共同研究として、長年追いつけてきた酵母のPAF合成に関与する酵素の遺伝子を単離し、新規なリソリン脂質アシル基転移酵素であることを見出しました。本研究は京大の玉置尚徳助手(現鹿児島大学准教授)が精力的に取り組んでくれたものです。

このように、さまざまな先生方に支えられ、地道に脂質生化学研究が続けられていることに感謝しつつ、このたび幹事にご推薦いただいたことを励みに、これからも頑張りたいと思っております。どうぞよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

会の活動状況

1 第49回日本脂質生化学会・研究集会の開催

実行委員長 : 北海道大学・先端生命科学研究所・五十嵐裕之教授
日時 : 2007年6月5日(火)、6日(水)
場所 : 北海道大学学術交流会館(北海道 札幌)
演題数 : イブニングセミナー1、特別講演3、シンポジウム11、一般演題85、

2 平成19年度日本脂質生化学会・総会の開催

平成19年6月5日(火)、北海道大学学術交流会館(北海道 札幌)にて開催された。

総会次第

西島正弘会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

(1) 平成18年度事業ならびに決算報告

平成18年度事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。

(2) 平成19年度事業計画ならびに予算案

平成19年度事業計画ならびに決算報告がなされ了承された。

(3) 役員・名誉会員・幹事の選出および名誉会員の推薦

平成20-23年度幹事の選出: 平成19年12月31日までの任期の幹事に加え、以下の7名の新幹事が推薦され、了承された。

青木淳賢(東北大学薬学部)
小林哲幸(お茶の水大学理学部)
須貝昭彦(北里大一般教育部)
田中進(高崎健康福祉大健康福祉学部)
中村和生(北里大一般教育部)
名取泰博(国際医療センター臨床薬理部)
中山玲子(京都女子大家政学部)

(4) 平成20年度(第50回)学会準備状況の報告

実行委員長 : 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・徳村彰教授
日時 : 2008年6月5日(木)、6日(金)
場所 : 徳島県郷土文化会館

(5) 平成21年度(第51回)学会実行委員長の出選

名古屋大学医学部 横山信治教授が実行委員長に出選された。

(6) 脂質データベースについて八杉悦了先生より説明がされた。

(7) 3rd International Conference on PLA₂ & lipid mediators について和久敬蔵先生より報告がなされた。

(8) 西島正弘先生より年会費に関する報告がなされ、このまま現行の3,000円に据え置くこととなった。

3 平成19年度日本脂質生化学会・第1回幹事会

日時: 平成19年6月5日(火)
場所: 北海道大学学術交流会館
議事: 上記総会に同じ

4 平成19年度日本脂質生化学会・第2回幹事会

日時: 平成19年12月17日(月) 17:00-19:30
場所: 学生会分館6号会議室

議事

(1) 平成19年度事業報告、決算案の審議がなされ、了承された。事業案は上記総会報告、決算は巻末を参照

されたい。

(2) 平成20年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された。

平成20年度事業計画

1) 平成19年度事業報告

会員数 672名 (平成19年11月30日現在)

(名誉会員 24名、正会員数 648名)

新入会 34名

退会 31名 (会費未納による除名13名含む)

(年度末退会希望 5名)

ご逝去 2名 (名誉会員 山添三郎先生 他)

会費納入率 75.1% (平成18年11月末実績 79.8%)

役員 会長 西島正弘 (平成20年12月31日迄)

庶務幹事 新井洋山 (同上)

会計幹事 工藤一郎 (同上)

会計監査 齊山洋右 (同上)

名誉会員

山川民夫(名誉会長)、赤松 稔、池田宏郎、市原宏介、植田伸夫、遠藤 亨、小野輝夫、鬼頭 誠、斎藤国彦、鈴木邦彦、齊山洋右、武富 保、内藤周幸、永井克孝、野沢義則、野島庄七、野田万次郎、箱守仙一郎、橋本 隆、林 陽、飯田静夫、藤野安彦、牧田 章、矢野郁也、山本 章、山本尚三、和久敬蔵

幹事

(任期 平成20年12月31日迄)

新井洋山、石永正隆、坂部洋之、今泉勝己、上田隆史、太田明徳、大西正男、岡島史和、賀佐伸省、加納英雄、楠瀬正道、小林俊秀、清水孝雄、菅野道廣、森 隆哉、平山 修、堀内正公、松澤祐次、三成 脩、宮下和夫、三輪民男、保田立二、山下 哲、山口信博、山口晃晃、山本徳男、吉岡 亨、吉本谷博、渡部紀久子

(任期 平成21年12月31日迄)

猪飼 篤、伊東 信、大木和夫、岡崎俊朗、笠間健嗣、金保安則、柳 泰典、占賀洋介、里内 清、杉浦隆之、瀧 孝雄、田口 良、竹縄忠臣、田邊 忠、寺本民夫、中島 茂、中西義信、保坂公平、松本幸次、村上 誠、室伏きみ子、横田一成、横山信治

(任期 平成22年12月31日迄)

池田郁男、岩森正男、植田和光、上田夏生、内海英雄、工藤一郎、小堀保則、佐々木雄彦、佐藤隆一郎、島崎弘幸、杉本博之、鈴木康夫、瀬高守夫、高桑雄一、高野達哉、多久和陽、塚谷博昭、徳村 彰、二本鋭雄、西島正弘、花田賢太郎、宮澤陽夫、横溝岳彦

(任期 平成23年12月31日迄)

青木淳賢、青山俊文、阿部敏明、荒木英爾、五十嵐裕之、猪川嗣朗、和泉孝志、坂重広重、井上圭三、入谷信子、梅田真綿、及川真一、大島美恵子、岡本光弘、奥山治美、川口昭彦、菊川清見、久下 理、久保田勝、黒木由夫、小林哲幸、齋藤政樹、渋谷 勲、須貝昭彦、杉田隆海、鈴木明男、田中進、谷川直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、中村和生、中山玲子、名取泰博、野間昭夫、平林義雄、廣野治了、深見希代子、水柿道直、宮崎 章、柳田晃良

賛助会員: 17社(計57口)

(5口) エーザイ(株)、小野薬品工業(株)、協和発酵工業(株)、塩野義製薬(株)

(4口) アステラス製薬(株)、アステラス製薬(株)、第一三共(株)、大正製薬(株)

(3口) 旭化成ファーマ(株)、エー・イー企画(株)、大鶴薬品工業(株)、(株)東京化学同人

(2口) 大塚製薬工場(株)、花王(株)、(株)ヤクルト本社、曹印乳業(株)

(1口) キュービー(株)

事業

イ) 平成20年度(第50回)学会

実行委員長: 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・徳村 彰 教授

日時: 2008年6月5日(木)、6日(金)

場所: 徳島県郷土文化会館(JR徳島駅より徒歩5分)

メインテーマ: 新時代への展開

学会用メールアドレス: jcbi08@ph.tokushima-u.ac.jp

ロ) 脂質生化学研究50巻発行

演題募集(Circular2008の発行時に) 1月下旬

演題申込および原稿締切 3月下旬

プログラム編成会議 4月上旬

入稿 4月下旬

講演集発送 5月中旬

ハ) 脂質生化学研究Circular2008の発行 1月下旬

ニ) 会誌

日本脂質生化学研究会総会 2008年6月5日

第1回幹事会 2008年6月5日

第2回幹事会 2008年11月下旬～12月上旬

(3) 第49回日本脂質生化学会の準備状況について徳村彰先生(徳島大)から説明があった。

(4) 第4回Phospholipase A2 and Lipid Mediators国際会議について 新井洋由 大会委員長

第4回Phospholipase A2 and Lipid Mediators国際会議の日程と場所について報告がなされた。

日時: 2009年5月13日(水)から16日(土)

場所: 文部省学術総合センター (神田)

(5) 日本脂質生化学会・脂質データベース構築委員会の活動報告があった。

2007年2月に新しいDatabase用サーバーに更新した。

2008年早々にLipid Bank Ver.2の完成予定

BNB2007での発表は反響が大きかった

(6) 脂質生化学会演題登録に関して、通常通り2月中旬に始めることが確認された。また、平成19年度と同様に演題登録をインターネットを用いて行うことが決定された。抄録集は従来通り、印刷された原稿を事務局に送ることとなった。

その他 以下の項目について論議がなされた。

・永井良三先生より、脂質データベースについて戦略をもって将来への対応策を立てることが重要ではなかろうかとの提案がなされ、西島会長を中心に活発な議論がなされた。各研究者のボランティアでまかなわれたこれまでの時代から次のフェーズに移るべきとの意見が出た。

・和久敬蔵先生より、脂質生化学会大会において特別講演と一般演題が同じ時間帯にならないようにすべきとの意見が出た。

日本脂質生化学会
平成19年度決算及び平成20年度予算(案)

収入の部 項目	平成19年度		平成20年度
	予算	決算	予算
正会員会費	2,000,000	1,747,000	2,000,000
賛助会員会費	900,000	570,000	900,000
講演集売上	100,000	190,000	100,000
広告収入	700,000	630,000	700,000
利子	1,000	0	1,000
雑収入	10,000	50,386	10,000
小計	3,711,000	3,187,386	3,711,000
前年度よりの繰越金	2,760,578	2,760,578	2,517,407
計	6,471,578	5,947,964	6,228,407

支出の部 項目	平成19年度		平成20年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	180,000	184,118	180,000
講演集製作費	730,000	770,448	730,000
版下準備費	0	0	0
旅費	100,000	28,600	100,000
郵送・通信費	450,000	442,653	450,000
事務用品費	150,000	74,550	150,000
公合費	150,000	149,148	150,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	10,000	0	10,000
事務経費	250,000	150,000	250,000
事務委託費	650,000	731,040	650,000
雑費	10,000	0	10,000
小計	3,630,000	3,430,357	3,630,000
次年度への繰越金	2,841,578	2,517,407	2,598,407
計	6,471,578	5,947,964	6,228,407

賛助会員

	(5口)	エーザイ株式会社 小野薬品工業株式会社 協和発酵工業株式会社 塩野義製薬株式会社
	(4口)	アステラス製薬株式会社 アステラス製薬株式会社 第一三共株式会社 大正製薬株式会社
	(3口)	旭化成ファーマ株式会社 株式会社エー・イー・企画 大塚薬品工業株式会社 株式会社東京化学同人
	(2口)	株式会社大塚製薬工場 花王株式会社 雪印乳業株式会社 株式会社ヤクルト本社
	(1口)	キュービー株式会社

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名誉会長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べることができる。
- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする、重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項

(4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員の便宜を供する。

本会の事務局は、〒102-8481 東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル(株)コングレ内におく。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月2日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

日本脂質生化学会の事務局は、(株) コングレ内に置き、以下の事務取り扱いを行なっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. Circular および要旨集の発送とその未着クレーム等の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル (株) コングレ内

Tel: 03-5216-5588

Fax: 03-3263-4032

E-mail: JLNL@congre.co.jp

日本脂質生化学会の年会費は3,000 円です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 西島正弘